

Ratio から Sapientia へ

— ジョン・ダンにおける理性と信仰をめぐる —

高 橋 正 平

序

ダンの初期の1590年代の詩の中でよく知られているものに『風刺詩第三番』(Satire III)がある。この詩は原稿によって“Of Religion”や“Upon Religion”のタイトルがつけられていることから明らかなように、若かりしダンが真の宗教とは何かを問い、自信に満ちた、力強い調子で真の宗教探究に真っ向から取り組んだものである。そのよく知られた一節でダンは熱心な、飽くなき努力によっていかなる障害があろうとも真理—宗教上の真理—は得られると次のように言っている。

On a huge hill, / Cragged, and steep, Truth
stands, and hee that will / Reach her, about
must, and about must goe; / And what the hills
suddenness resists, winne so; / Yet strive so,
that before age, deaths twilight, / Thy soule
rest, for none can worke in that night.

(ll. 79-84)⁽¹⁾

そしてためらうことなく直ちに真理を見つけるために行動せよと述べ、精神の努力によっては難しい知識も獲得でき、宗教上の諸神秘ですらも太陽のごとくまぶしいが理解不可能ではないと言う。たとえ精神が獲得できない宗教上の真理があるとしてもそのために我々は真理の探究を止めることはできない。なぜならば真理は真理として厳然と存在し、我々はそれに向かって進むことができるからである。

To will, implies delay, therefore now doe.
Hard deeds, the bodies paines; hard knowledge
too / The mindes indeavours reach, and mysteries
Are like the Sunne, dazling, yet plaine to all

eyes; (ll. 85-88)

作品全体にみなぎる真理に立ち向かう若々しい熱情、迷いを知らない自信に満ちたダンの態度は我々に貪欲とも言えるほどの「人間の学問と言葉への水腫症的な際限のない欲求」(an Hydroptique immoderate desire for humane learning and languages)⁽²⁾に燃えていた1590年代のダンの姿を彷彿させる。20代前半のダンにとっては宗教の真理、神秘と言えども知識即ち理性の力によって獲得されうるものであった。『風刺詩第三番』同様山頂にそびえる宗教の真理が自然理性によって獲得されるか否かをダンは1627年5月の説教で扱い、以下のような興味深い一節を述べている。

Then when *Abraham* went up to the great
sacrifice of his son, he left his servants, and
his *Asse* below: Though our naturall reason,
and humane Arts, serve to carry us to the hill,
to the entrance of the mysteries of Religion,
yet to possess us of the hill it selfe, and to
come to such a knowledge of the mysteries of
Religion, as must save us, we must leave our
naturall reason, and humane Arts at the bottome
of the hill, and climb up only by the light, and
strength of faith. (VIII, 54)⁽³⁾

宗教の神秘は山頂にそびえ、その山の入り口までは理性でも行けるが、我々の救済に必要な宗教の神秘を知るために山頂に行くにはもはや理性ではどうにもならず、信仰という光と力に頼らなければならない。1627年と言えばダンが55才の時で、この年にダンの親密な二人の女性—ベドフォード伯爵夫人ルーシィ (Lucy, Countess of Bedford) とマグダレン・ハーバート (Magdalen Herbert) — がなくなり、又娘のルーシィ

をもなくしており、ダンにとってはことのほか失意のどん底にあった時期であった。それにしても『風刺詩第三番』と説教との間には宗教に対していかに異なった態度が見られることであろうか。『風刺詩第三番』で見た邁進する努力には不可能なものは何も存在せず、宗教上の諸神秘さえも人間の理性で獲得できるといった自信に満ちたダンの姿はこの説教では消え、理性を捨てて、信仰による以外に宗教の本質は得られないと言う。この見解の相違はダンにあっては何を物語っていることであろうか。宗教の諸神秘が理性ではどうすることもできないということがわかり、あえて理性崇拜を捨てて、信仰との妥協の中に解決策を見いだそうとした一歩後退した姿であろうか。1590年代のダンと1627年のダンとの間に何が生じたのか。ダンは一歩果たして理性を捨てて、徹底した反知性主義・信仰主義者の姿勢をとることによって宗教上の問題点を解決したのであるか。本論の目的はダンの1590年代の作品から後期の説教を通してダンの理性と信仰の変遷をたどり、理性と信仰に対するダンの態度を明確にすることにあるが、ダンは一歩理性を捨て去ることはせず、徐々に信仰の重要性を認識し始め、理性と信仰の調和のなかに彼独自の理性・信仰観を見出すようになったことを論じていきたい。

1

初期のダンには著しい知性主義の姿勢が見られ、少しの迷いも感じさせないほどの強靱な論理が初期の作品を特徴づけていることは後のダンを考えるとき決して看過することのできない重要な点である。知性への欲求が若者特有の特徴であるとはいえ、初期の『風刺詩』(Satires), 『エレジー』(Elegies), 『唄とソネット』(Songs and Sonets), 『書簡詩』(Verse letters) 等に見られるダン独特なロジックによる証明、説得による詩の展開に我々は注目しなければならない。これらの詩のなかで宗教的な問題を扱ったものは上に引用した『風刺詩第三番』以外はほとんどない。『風刺詩第三番』ではすでに見たように宗教上の神秘ですら人間の飽くなき力によって獲得されるものであった。1590年代の初期のダンの作品のなかで唯一宗教を論じている点でこの『風刺詩第三番』は注目に値する作品であるが、そこでは理性に対する疑いは見られず、ダンは一歩信仰には無縁の 'a natural man' のような様相を呈

している。しかしダンが 'secular' から 'sacred' な時代へと移っていき、本格的に宗教的テーマを扱う詩を書くようになるとそのような知性主義の姿勢に影が差し込んでくる。その最初が『連禱』(Litanie) (1608年)である。⁴⁾神の恩恵にすぎり、罪の汚れからの再生をうたうこの詩では「青年時代のうねぼれと情欲の炎」(youths fires, of pride and lust) (l.23) にさいなまれるダンが自己の虚栄や理性を捨て、信仰によって神にすがろうとする意識的な姿勢が著しい。例えば、三位一体については次のように言う。

O Blessed glorious Trinity, / Bones to Philosophy,
but, milke to faith, (ll.28-29)

三位一体は哲学(理性)にとっては骨のごとく固く歯が立たないが、信仰にとってはミルクのごとくたやすく飲み込まれ、滋養となりうると述べ、三位一体のような神秘を理性よりは信仰の対象と見なしている。又理性を使いすぎると信仰の光は消滅する可能性があるとして述べる。

Let not my minde be blinder by more light
Nor Faith by Reason added, lose her sight.
(ll.62-3)

あるいは過度の知識のための知識を求める好奇心(my excesse/In seeking secrets and Poetiquenesse) (ll.71-2) が消え去ることを願ったり、ダンは一歩も自己に潜む理性が表に出てくるのを押さえつけようとする。理性や機知によって神を論じることが神への接近よりは逆に神からの離反を意味することを十分に意識していながらもなおダンは一歩理性の誘惑から逃れることができない。神への必死な訴えを通してそのようなディレンマからの脱出を試みているダンの姿が『連禱』には見られるのである。次の一節では機知を發揮して信心深くなるように心が動かされることから救ってくれるよう神に訴えている。

When wee are mov'd to seeme religious
Only to vent wit, Lord deliver us. (ll.188-9)

あるいは好奇心から宗教を論じたり好奇心によって影響されることがあってはならないとも言う。好奇心は

虚栄に通じ、後年ダンが特に説教では厳しく批判している点である。

From being spies, or to spies pervious,
From thirst, or scorne of fame, deliver us.
(ll.152-3)

ダンはいかに決して理性を否定するのではない。ダンにあっては理性はもともと神へ向けられるべきものである。ところが我々は理性を神とは無関係に、単なる理性のための理性として使用したが。次の一節では知識は神の大使であり、「高尚なる善一神」を知るべく本来生まれた理性が自然のつまらない事に係わることがあってはならないと言う。

That learning, thine [God's] Ambassador,
From thine Allegiance wee never tempt,
.....
That wit, borne apt, high good to doe, / By
dwelling lazily / On Natures nothing, be not
nothing too,
.....
Hear us, ... (ll.235-243)

ダンでは人間の理性を神に由来する神的な性質をもつものとしてみなし、決して否定的には見ない。我々にあっては理性は消し去ることのできない生得の能力である。ただそれをいかにして使用するかが問題で、好奇心から理性を使用する場合もあるし、敬虔に宗教的な問題に向ける人もいる。つまり理性が単なる「知識」として終わるか、「英知」として終わるかによって理性も異なる様相を呈してくる。ダンでは前者で終わる人を「自然人」(a natural man)と呼び、後者で終わる人を「再生した人」(a regenerarate man)と呼ぶ。両者を分けるのは理性だけかそれとも理性と合体した信仰である。これまで見てきた『連禱』では自己のなかに頑迷に潜む理性をいかにして神へと向けるかがダンの大きな関心事であった。理性の誘惑に抵抗する一方でまた理性を完全には捨てきれないでいる。理性と信仰のはざままで微妙に揺れ動くダンの姿を見ると自己を完全に神へと明け渡すことがダンには可能であったのかという疑問が出てくる。理性によって神を論じることには当然のことながら限界がある。その限界を超えていくのが信仰なのであろう。ダンには終始限界性

のある理性とそれを補う信仰という問題がつきまっていた。我々は理性をいかに使用できるが、真のキリスト教徒として生きるためには単なる「知識」では不十分で「英知」を身につけなければならないことをダンでは徐々に理解し始めるのである。「英知」を身につけることによって人は「自然人」から「キリスト教徒」となることができる。理性と信仰は絶えず相争っており、両者は常に相手をおさえつけようとしている。ダンのような自我の強い人間にあっては最初は理性が主流を占め、次に信仰が理性の不完全性を補助することになる。ダンの初期から後期への軌跡は言わばいかにして理性を「英知」へと向けるかにある。『連禱』において見られるこのような理性と信仰の葛藤は他の詩にも見られる。キリストの生誕から磔刑、復活、昇天をうたった『ラ・コロナ』(La Corona) (1607年)は、⁽⁵⁾各ソネットの最終行が次のソネットの最初の行を成し、最後のソネットの最終行が最初のソネットの一行目に来て、全体として「コロナ」、円環を成すという構造であるが、概して機知と知性が目立つ一方、個人的な緊迫感に欠けるところがあり、'religious exercise' と評する人もいるほどの詩である。⁽⁶⁾知的な人為性が顕著であるとは言え「人間の力を超える奇跡」(miracles exceeding power of man) (1.56) を信仰で受け入れようとするダンの姿を我々は見ることが出来る。例えば寺院でのキリスト発見を扱った第四ソネットで、ダンはキリストの父のヨゼフに話しかけるが、人間の形をした神、キリストと比べるといかに人間の知識がささいなものであるかを次のように言う。

Joseph turn back; see where your child doth sit,
Blowing, yea blowing out those sparks of wit,
Which himself on the Doctors did bestow;
(ll.44-6)

幼いキリストが博士達を悩ますほどの質問をする姿はまさに「人間の力を超えた奇跡」であるが、キリスト一神の知識と比べ人間の知識はいかに些細なものであるかを示している。そしてダンはその「奇跡」を何ら疑うことなく受け入れている。『連禱』や『ラ・コロナ』ではまだ意識的に宗教へと眼を向けようとするダンの姿が特徴的であり、神の前での一人の敬けんなキリスト教としての神との個人的な真剣な葛藤は見られ

ない。しかしこれらの詩では何とかして理性を神へと向け、より真摯な信仰によって神への接近を試みるダンの姿が著しい。他の宗教詩でも理性と信仰との間を揺れ動くダンの姿が見られる。‘cross’を様々なもののなかに見ようとする‘The Crosse’、墓が非金属を金属へと変える錬金術のランビキ (limbeck) であるとの奇想を主に展開する‘Ressurrection, imperfect’、キリストの誕生と死が同一日にあつたことをパラドクシカルに扱った‘Upon the Annunciation and Passion falling upon one day, 1608’、あるいは‘Good Friday, 1613. Riding Westward’。これらの詩では機知、奇想、パラドックスを軸に、詩が展開するが、最後にはより感情的な、より想像的な神との対話を行い、それまでの強靱な論理性に揺らぎが生じてくることもある。特に‘Good Friday, 1613. Riding Westward’⁽⁷⁾では本来ダンは東のゴルゴタの丘のキリストに眼を向けるべきなのに‘Pleasure’と‘business’のために反対側の西に向かっている。しかしそれでもダンの‘memory’は十字架上のキリストの姿を忘れることができず、キリストへと向かざるをえない。「楽しみ」や「仕事」は世俗の世界を表し、その世界に引かれてダンは西へと向かう。しかしいかに俗界が魅力に富もうとも十字架上のキリストを忘れさせることはできない。キリストの「慈悲」や「恩恵」なくしてダンの救済はありえない。俗の世界に留まる限りキリストの神秘を理解することはできない。

I turne my back to thee [Christ], but to receive/Corrections, till thy mercies bid thee leave./O thinke me worth thine anger, punish me,/Burne off my rusts, and my deformity, Restore thine Image, so much, by thy grace, That thou may'st know me, and I'll turne my face. (ll.37-42)

理性は世俗的な事柄に、信仰は靈的な事柄に係わる。馬上のダンは東、つまり永遠なる生命、信仰に背を向け、西、俗界、理性の世界へと踏み込もうとしている。東か西かの間で揺れ動くダンはしかし最後には西から東へと眼を転じる。これは最終的な信仰の勝利を意味しよう。このような世俗の世界から靈の世界、理性の世界から信仰の世界への progress は例えば ‘A Hymne to Christ, at the Authors last going

into Germany’⁽⁸⁾にも容易に見られるものである。この詩ではダンは英国を後にしドイツへと向かうが、それまでの世俗的な生活に別れを告げて、‘th’ Eternall root of true Love’ (l.14) を求めてドイツへと出発する。

Marry those loves, which in youth scattered
bee/On Fame, Wit, Hopes (false mistresses) to thee./Churches are best for Prayer, that have
least light:/To see God only, I goe out of
sight:/And to scape stormy dayes, I chuse an
Everlasing night. (ll.24-28)

「偽りの恋人」である「名声」、「機知」、「俗的な野心」から「真の恋人」キリストを求めての progress がダンの宗教詩の特徴の一つであるが、世俗的な女性を口説くために使ったであろう機知を今度は神へと向けようとしている。決して機知を捨て去ることはしない。否定されるのは機知のための機知である。ダンには常に聖と俗、肉と霊、理性と信仰との対立があり、最後まで両者の調和を目指していたことがわかる。‘Hymne to God my God, in my sicknesse’⁽⁹⁾でも感覚や証明へ関心を示す‘Physitians’とそのような事実の世界を超えて靈の世界を目指すダンとの対立が見られる。ダンは科学的、実証的、感覚的な精神に背を向けていながら、病床のベッドに横たわる自らの姿を地図とみなし、地図の西と東の両極端が地球儀のごとくまるくすれば出会うように、死(西)と復活(東)は出会うと述べ、死への恐怖を取り除こうとする。

I joy, that in these straits, I see my West;
For, though their currants yeeld returne to none,
/What shall my West hurt me? As West and East/
In all flatt Maps (and I am one) are one,
/So death doth touch the Resurrection.
(ll.11-15)

事実、経験、感覚、実証の世界、言わば理性の世界よりも靈の世界、信仰の世界へと進もうとするダンが自らを地図であるとの奇想を駆使した機知に富む詩を書いていることはパラドクシカルであるが、裏を帰せば死や復活といったキリスト教の本質を描くにあたってダンも理性に頼らなければならなかったことを示唆している。キリストは生きるために死を自ら選んだこ

と、キリストの死は生であるということ自体が一種のパラドックスであり、そのようなパラドックスを扱うには詩人も又パラドクショナルにならざるをえない。同様なことは自分の名前 ‘Donne’ と ‘done’ の地口 (pun) をリフレインとして使用した ‘A Hymne to God the Fater’⁽¹⁰⁾ についても言えよう。‘When thou [God] hast done, thou hast not done, For I have more.’ を第1, 第2スタンザの, ‘And, having done that, Thou haste done, I have no more.’ を第3スタンザの, それぞれ最終2行に組込み, 詩人の死に際して神の息子 (Son—Sun) の恩恵の光によって救済への信仰なくして死ぬことの恐怖が消えらうたっているが, 詩人の死と神の救済という非常に緊迫した問題を扱いながらも, ダンは地口を使用して, 論理的に詩を構成せざるをえない。ダンは自らの死とキリストの死, 復活へ大きな関心を示し, 徐々に個人的な感情的な強い情熱をキリストへ注ぐが, それでも機知, 奇想, ロジックに依存せざるをえない。そのために神とダンとのあいだには絶えずわざとらしい芝居がかった感情の刺激が目立ち, ダンが言葉を発すれば発するほど, 読む者に冷ややかな溝をつくることになる。これは ‘secular’ な詩を代表する『唄とソネット』についても言えることで, 女性との愛を論理的に扱うこと以外にダンは恋愛詩を書けず, そのためにダンは女性との愛をうたう代わりに愛を論じているという印象を与えているのである。ダンにはこのように理性を捨てて信仰にすがりたいという欲求がある一方, 又その理性をどうしてもかなぐり捨てることができなというディレンマを示す。この葛藤はダンには終生つきまとうが, 完全に捨て切れない理性をいかに扱うか, いかにその問題に解決を見いだすかは後期の説教を待たねばならないが, 理性と信仰へのそのような相矛盾したダン姿を他の詩にも見てみたい。

2

ダンは多くの友人や支援者 (patron) にあてて書簡詩 (Verse letters) を書いているが, その一つにベッドフォード伯爵夫人ルーシィ (the Countess of Bedford, Lucy)⁽¹¹⁾ に書いたものがある。これらの詩はいささか世辞的な感が強いが, ダンは次のようにルーシィを神化する。

Reason is our Soules left hand, Faith her right, / By these wee reach divinity, that's you; / Their loves, who have the blessings of your sight, / Grew from their reason, mine from faire faith grew.
(11.1-4)

理性は魂の左手, 信仰は右手と定義し, この両者によってルーシィの神性に到達するという。西洋における左と右のどちらかが優位を占めるかを考えれば, ダンは信仰を理性よりも重視していることが容易に理解できよう。3-4行で理性に頼ってルーシィを見る人と信仰によってルーシィを見るダン自身の違いに触れるが, 理性による人は単にルーシィの外見上の美しさに眼を奪われるだけであるが, 信仰によるダンのルーシィへの愛情はより内面的な, 精神的なものである。理性と信仰の優劣はありながらも, しかしダンは決して信仰だけでルーシィの神性に到達しようというのではない。あくまでも理性と信仰は相補うことによってルーシィの神性を把握するのである。次の一節では左手—理性—に一方向的に頼ることは ungracious であるが, しかしそれでも左手なしで済ますことはできない。そしてすでにルーシィの神性を信じているのだが, ダンは自らの信仰を明確にするためにその神性を理解すると言う。

But as although a squint lefthandednesse / Be' ungracious, yet we cannot want that hand,
So would I, not to encrease, but to' expresse
My faith, as I beleeve, so understand. (11.5-8)

ルーシィという女性の神のごとき性質への誇張した賛辞ではあるが, 理性と信仰によって神へ到達するという考えは以後のダンの根幹を形成していくことになる。理性と信仰は互いに相手を排斥することによって自身の存在を確認するのではない。互いを排斥することよりも両者の調和がダンの目指すところである。この見解は又信仰のみといった極端な清教徒主義へのダンの反発をもしめしているだろうが, ダンにとってはルーシィという女性を理解するためには理性は決して捨て去るべきものではなく, むしろ信仰を助けていくものなのである。おなじルーシィへの別の書簡詩(‘Honour is so sublime perfection’) では理性と宗教との関係について次のように言っている。

Discretion is a wisemans soule, and so/Religion
is a Christians, and you know/How these are
one; her yea, is not her no. (ll.40-1)

‘discretion’は広義には理性を意味し、‘religion’は信仰であろうが、両者は一つで、互いに反目しあうのではなく、結局は同じことを言うのだと言う。そして理性と信仰は本来は一体化しているのであって、両者を一つにしたり、信仰よりも理性を重視したり理性なしで信仰だけであったりすることによって両者の関係を破壊することがあってはならない。理性は単に信仰を援助するのではなく、信仰の一部であるときえ言う。

Nor may we hope to solder still and knit
These two, and dare to breake them; nor must
wit/Be colleague to religion, but be it. (ll.43-5)

知性 (wit) は宗教であるというダンはどこでも理性なしで宗教を考えてはいない。極端なピュリタニズムとカトリック教の中道を歩むアングリカンとしてのダンの一面が窺われる一節であるが、ダンは信仰のみとか理性のみとかの道を歩むことはしない。ダンは‘To Sr. Edward Herbert. At Julyers’ (1610年)⁽¹²⁾のなかで‘Man is a lumpe, where all beasts kneaded bee/Wisdome makes him an Arke where all agree;’ (ll.1-2)と述べている。人間は土の固まりでそこでは様々な人間の欲望がひしめきあっているのが現状であるが、その欲望を抑制するのが「英知」(wisdom)であるという。この「英知」によって人間は土の固まりから種々の動物が相争うこともなく乗りこんだノアの箱船のようにもなれるのである。この「英知」こそ理性と信仰が均衡をとっている状態にすぎず、以後ダンは「英知」を求め続けることになる。ダンは初期の知性主義から次第に反知性主義へ移行していったと言ったのはブレドヴォルド (Bredvold) であり、⁽¹³⁾この考えはダン研究において大きな影響を及ぼしてきたが、決してダンは反知性主義の態度は取らない。ダンは理性を振り払いたくとも振り払うことができず、終始理性から逃げるできない。理性を完全に捨て切れないダンには又ヒューマニストとしてのダンの姿と17世紀の英国及び西欧の時代の趨勢が色濃く反映されているが、ダンの宗教詩の中で神との葛藤を描き、神への

愛の中に救いを見い出す『聖なるソネット』(Holy Sonnets)にも当然のことながら理性と信仰が微妙に錯綜している。

3

『聖なるソネット』⁽¹⁴⁾に一貫して流れているのは神への救いの希望と神から見捨てられる絶望の間で揺れ動くダンの姿であろう。過去の罪を悔い、必死に神の愛にすがり、心の平安を願うダンの姿はその個人的な直接的な激しい神への訴えを通して緊迫した雰囲気をかもしだしている。これらのソネットでもしかし強い自我が神との対話を行い、神がダンの要求を満たさざるをえない状況を神へのたたみかける問いによって作りあげるのである。ダンは神の前での無力な人間の姿を描くがしかし又人間の理性をも忘れることはしない。『聖なるソネット』第1番では詩人の再生には自らの力ではどうする術もなく、神の恩恵が不可欠であると言う。

Except thou [God] rise and for thine owne
worke fight, / Oh I shall soone despaire, when I
doe see / That thou lov' st mankind well, yet
wilt' not chuse me, / And Satan hates mee, yet
is loth to lose mee. (Holy Sonnet 1, ll.11-4)

ダンは神によって作られた「作品」であるが、その作品に対して神が立ち上がらなければダンは悪魔の手に落ちることになる。ダンは自らの力ではこの苦境から逃れることはできない。救い出してくれるのは神である。あるいは罪で汚れた魂が死に際して悔い改めを願うが、悔い改めに必要な恩恵も又神によってしか与えられないのである。

Yet grace, if thou repent, thou canst not lacke,
But who shall give thee that grace to beginne ?
(Holy Sonnet 2, ll.9-10)

人間の神への全面的な依存、腐敗、墮落した人間には悔い改める能力もない。ただひたすら神が手を差し伸ばすのを待つしかない。更に『聖なるソネット』第3番では死や最後の審判、死後の永世についての恐れや疑念を扱うが、次の一節を見る。

Impute me righteous, thus purg'd of evil,
For thus I leave the world, the flesh, and devill.
(Holy Sonnet 3, ll.13-4)

我々が義となるのは我々の善行によるのではない。我々の魂は悔い改めによって罪から除かれるが罪人であることにはかわりなく、魂は義とはならない。義となるのはキリストの身代わりによるのである。又罪が余りにも多くて最後の審判で神の恩恵を請い願うには遅すぎるので今悔い改めの方法を教えてくださいと神に懇願する。

'Tis late to aske for abundance for thy grace,
When wee are there; here on this lowly ground,
Teach me how to repent; for that's as good/As
if thou' hadst seal'd my pardon, with thy blood.
(Holy Sonnet 4, ll.11-4)

悔い改める方法すらダンはず、ひたすら神を待つばかりである。悔い改めによって神の恩恵が与えられ、キリストの血がダンにも適応されることを知る。悔い改めの方法を知ることによってダンは最後の審判への恐怖を取り除き、救済を確信するに至る。これらの詩ではまだダンと神との間には深い距離があり、ダンは主体的に救いのためには何も行うことができない。神の恩恵は我々の善行への報いとして我々に与えられるとするのはカトリック教であるが、ダンはここでは反カトリックの態度を示している。無力な人間が神の前では何もなすことができず、ただ神の恩恵を待つというのが『聖なるソネット』のパターンの一つとなっている。神が詩人の罪を忘れてくれることを慈悲として考えたいと述べた第5番でも神の慈悲に頼る以外に方法はない。

That thou remember them [the speaker's sins],
some claime as debt,/I think it mercy, if thou
wilt forget. (Holy Sonnet 5, ll.13-4)

又「死やおごるるなかれ」で始まるソネット6番では死は恐れるに値しないと12行目まで神に依存することなく「自然人」のごとく進むが、最後の2行に至って詩人の死への恐怖は結局はキリストによって取り除かれる。一瞬の死という眠りの後、人は永遠の生命を得て、復活するのである。それまでの理性が信仰によってとって代わられる。

One short sleepe past, wee wake eternally,/And
death shall be no more, Death thou shalt die.
(Holy Sonnet 6, ll.13-4)

6番と同じように最終2行に至って罪深い人間のために死んだキリストが登場することによってそれまでの非キリスト教的なトーンが一変する8番でも前半の「自然人」的な詩人は人間の罪を背負って自ら死を選んだキリストへもはや理性を注ぐことはできなくなり、そこには信仰しか働かせることができない。

But their Creator, whom sin, nor nature tyed,
For us, his Creatures, and his foes, hath dyed.
(Holy Sonnet 8, ll.13-4)

あるいは神の敵サタンにとらわれている詩人がサタンからの切り離しを神に願う第10番で次のように言う。

Yet dearly' I love you, and would be lov'd faine,
But betroth'd unto your enemie,/Divorce mee,
'untie, or breake that knot againe, Take mee
to you, imprison mee, for I/Except you' enthrall
mee, never shall be free,/Noe ever chaste,
except you ravish mee.
(Holy Sonnet 10, ll.9-14)

サタンの手中にある詩人は神を愛したいし愛されたいが、サタンのもとにあっては何もすることができない。ただ神に願うのはサタンから我が身を断ち切ってもらうことだけであり、そうすることによってのみ詩人は苦境から脱することができる。神によってレイブされなければ純潔にはなれないとダンらしいパラドックスをも使用するが、ここでもダンは全く受動的でひたすら神の行動を願うだけである。1635年追補の『聖なるソネット』第1番でも神の許しを得て天上を仰ぎ見ると立ち上がると言う。

Onely thou art above, and when towards
thee/By thy leave I can looke, I rise againe;
(ll.9-10)

しかしサタンが詩人を誘惑しづけ、神の助けがなければ一時間も自らを支えることはできない。神の助けは恩恵にはかならず、恩恵はサタンの手管に先んずるために翼を与えることができるのである。

But our old subtle foe so tempteth me, / That
not one houre I can my selfe sustaine; / Thy
Grace may wing me to prevent his art / And
thou like Adamant draw mine iron heart. (1.11-4)

サタンの誘惑から逃れる方法は結局神の恩恵による以外はない。ひたすら神の恩恵を願うダンに自ら成し得るものはない。あるいは詩人の心を汚してきた俗世の情欲と妬みを神を思う熱情で焼き尽くしてはしいと願って、次のように言う。

But oh it [the speaker's world] must burnt;
alas the fire / Of lust and envie have burnt it
heretofore, / And made it fouler; Let their flames
retire, / And burne me o Lord, with a fiery
zeale / Of thee and thy house, which doth in
eating heal. (Holy Sonnet added in 1635, 2, 11.10-4)

情欲と妬みに支配された詩人は新たに生まれ変わって神と神の館を思い始めたがっている。そしてその思いによって詩人は自分の心を神によって占拠してもらいたいのである。しかし詩人は自らの力で情欲と妬みの炎を消し去ることはできない。詩人はその準備ができていても主導権は神にあり、神に懇願せざるをえないほど無力な人間である。このように『聖なるソネット』では人間の神の前での無力さ、倭小さと罪深い一人の人間の神の愛、神の恩恵を願う姿が描かれる。一人の人間が神の恩恵を請い願うときにはもはや理性は不必要になる。ただ神を思う信仰だけがその人間の支えとなる。しかし『聖なるソネット』に見られるのは神に全面的に服従する詩人の無力な姿だけではない。マロッチィ (Arthur F. Marotti) も言うように、⁽¹⁵⁾確かに『聖なるソネット』には「主張」と「服従」との間に自我の葛藤があり、神に従順に従おうとするダンの意志とダンの神へ逆らい、自己の力を完全に否定しきれない二つのベクトルが相拮抗しあっている。このようなパターンは『聖なるソネット』第1番に見られる。多くの資格によって詩人は神のものであることを主張するこの詩でダンには自らが神によって神のために作られたこと、キリストのあがない、息子、下僕、神の羊、神の似姿、聖霊の住む神殿であることを主張する。それなのになぜサタンが詩人を奪うのか、ダンには理解できない。

As due by many titles I resigne / My selfe to
thee, O God, first I was made / By thee, and
for thee, and when I was decay'd / Thy blood
bought that, the which before was thine, / I am
thy sonne, made with thy selfe to shine, / Thy
servant, whose paines thou hast still repaid, / Thy
sheepe, thine Image, and till I betray'd / My
selfe, a temple of thy Spirit divine; / Why doth
the devil then usurpe in mee? / Why doth he
steale, nay ravish that's thy right?

(Holy sonnet 1, 11.1-10)

詩人からすればサタンの手に陥る理由など全然ないはずなのに、それでも詩人はサタンに誘惑されている。本来神のものである詩人をなぜサタンが奪うのかその理由を明確にしてくれるよう神へ願う。詩人の願いを少しも聞いてくれない神への苛立ち、不満、抗議には詩人の自己主張的な姿が如実に表れているがそのような姿勢は最終的には神への慈悲、恩恵を願うことによって終わる。あれこれと神に手向かい、神に対して反逆的な態度を取るが、それが結局は無駄であることがわかり神への慈悲、恩恵を願わざるをえない。同じような構造は第5番にも見られる。この詩は人間と同じ被造物のなかで有毒な鉱物、アダムとイヴが食べた善悪の知恵の木、好色なやぎ、蛇は地獄に落とされないのでなぜ自分だけが地獄に落とされるのかと神に問う。

If poysonous mineralls, and if that tree, / Whose
fruit threw death on else immortall us, / If
lecherous goats, if serpents envious / Cannot be
damn'd; Alas; why should I bee? / And mercy
being easie, and glorious / To God, in his sterne
wrath, why threatens hee? (11.1-8)

鉱物、植物それに人間以外の動物はどんなに悪を働いても地獄に落とされる心配はないのに、ただ人間だけが地獄に落とされる運命にある。なぜ人間の罪だけが地獄に落とされるに値するのかダンには理解できない。なぜ理性があるからといってそのために人間の罪だけが憎むべきものなのか。人間だけに付与された理性が逆に人間を一層罪深くしているのはなぜか。更にそのような罪深い人間にとって神はたやすく慈悲を示すこともできるのに、慈悲を示すどころか逆に厳しい怒り

のうちになぜ威嚇するのか。救いの手を差し延べてくれない神にダンは次々と「なぜ」を発し、神に対して激しい口調で言い寄る。ところがこのようなダンの神を問い詰めるような敵しい態度は後半の6行で一変する。それまでの神に対しての反逆的な口論的なダンには自らの非を認め、神と口論する自分は一体何者なのかとの疑問を発するに至る。墮地獄についていかに神と言いついてもその可能性は消えはしないことをダンはさとる。人間の罪は結局は十字架上のキリストの死と人間の後悔の涙があいまって消滅するのである。それまでの神との争いからは何も得ることができないことをダンはさとる。自己に頼っているのは救いは得られず、詩人の罪からの救いは最後にはキリストの贖罪、慈悲に依存せざるをえない。

But who am I, that dare dispute with thee?
O God, Oh! of thine onely worthy blood,
And my tears, make a heavenly Leathean flood,
And drowne in it my sinnes blacke memorie.
That thou remember them, some claime as debt,
/I thinke it mercy, if thou wilt forget.
(11.9-14)

これまで見てきたように第5番のソネットでも前半での詩人「主張」があり、後半で「服従」が表れる。詩人の強い自我が神への自己放棄を阻止するようにみえるが、詩人は突如神との和解を試みる。このようなパターンは宗教改革時のアウグスティヌス解釈によるとグラント (P. Grant) は言うが、⁽¹⁶⁾ ダンには従順に神に自らを投げ出したという欲求と又自己の主張を貫き通したいという強固な意志が絶えず同居しており、両者の葛藤がダンの詩をより劇的ならしめているのである。ダンの『聖なるソネット』を見ると全体的に命令文が多いのが一つの特徴であるが、裏を返せばいかにダンが自己の要求を神に対して行っているかの証でもあろう。そのようなダンの神への激しい要求を扱った詩の一つが 'Batter my heart, three person'd God' で始まる第10番である。ダンには自らの再生を願って神に願うが神の敵であるサタンに囚われ、身動きができない状態にいる。

Batter my heart, three person'd God; for, you/As yet but knocke, breathe, shine, and seeke to mend;/That I may rise, and stand, o'erthrow

mee, 'and bend/Your force, to breake, blowe, burn and make me new./I, like an usurpt townne, to' another due,/Labour to admit you, but Oh, to no end,/Reason your viceroy in mee, mee should defend,/But is captiv'd, and proves weake or untrue, (11.1-8)

詩人の再生のために三位一体の神はただ詩人を「軽く打つ」だけでは不十分で、「強く打ち」、更には「打ち倒す」必要がある。罪にまみれた詩人が再生するには過去の自己を完全に破壊し、一から出直さなければならない。破壊からの創造である。しかし詩人はサタンの手中にあり全くの無力さをさらけだしている。神が少しでも動けば詩人はサタンの束縛から逃れ、神のもとへいくことができる。それなのに神は無言のままである。詩人の呼び掛けに対しての沈黙する神への苛立ち、不満が詩人の自己主張により激しい口調で述べられる。7行目の「神の代理である私のなかの理性」でも詩人のまだ十分に自己の力を信じきっている姿がうかがわれるが前半での詩人の激しい口調は後半にいたっても続く。

Yet dearly 'I love you, and would be lov'd
faine,/But am betroth'd unto your enemy,
Divorce mee, 'untie, or breake that knot againe,
Take mee to you, imprison mee, for I/Except
you' enthrall mee, never shall be free,/Nor
ever chaste, except you ravish mee. (11.9-14)

自らの意に反してサタンと婚約している詩人は結婚する前にサタンからの絶縁を神に願う。そして神が詩人を監禁し、奴隷としなければ自由にならず、神から肉体を奪われなければ清い体にはならないと神に訴える。神の監禁が詩人の自由をもたらし、神の強姦によって詩人は純潔になるというパラドキシカルな大胆な表現は詩人のやむにやまれぬ緊迫した姿を表しているが、前半の神への苛立ちから後半の神に対して一心に助けてもらいたいという詩人の気持ちの変化のなかに「主張」から「従順」への変化を読み取ることができる。ダンの『聖なるソネット』では詩人が一方的に神に話しかけるだけで、神は詩人に対しては一言も話してくれない。神への要求だけが語られ、神は沈黙のままである。言わば詩人の一人芝居が演じられているわけで、しきりに神との対話を願う詩人の姿が一人全

面にていのである。この第10番のソネットはそのようなダンの一面をよく表しているが、前半での神への苛立ちから後半の神への無条件な依存のなかに、広く言えば理性から信仰へと歩む詩人の姿がうかがわれるのである。同様の構造をもつソネットをもう一つだけ取り上げてみよう。1635年追補の第1番である。この詩も前半8行で詩人の神への訴えがなされる。詩人は神から創造されたことを確信しているが、死を目の前にした詩人はしかし救いの確証がもてない。神の創造による詩人は滅びることがあるのかと疑問を發する。

Thou hast made me, And shall thy worke decay
?/Repaire me now, for now mine end doth
haste,/I runne to death, and death meets me as
fast,/And all my pleasures are like yesterday,/I
dare not move my dimme eyes any way,/Despaire
behind, and death before doth cast/Such terrour,
and my feebled flesh doth waste/By sinne in
it, which it t'wards hell doth weigh; (ll.1-8)

神から作られた詩人は本来ならば死とともに永遠の生命を得るはずなのに確信がもてない。それまでの罪深い生涯を振り返ると背後の絶望と前方の死の恐怖のために詩人は恐怖に陥れられ、弱く、罪深い、容易に誘惑される肉体は罪のために衰え、復活の対象たる肉体は罪によって地獄へと追いやられる。罪のためには詩人は救いを得られず、逆に地獄へ落とされる可能性が強い。まさに詩人は神から見離された絶望の状況にある。神の子たる人間、キリストはたとえ詩人が罪深くとも慈悲の手を差し延べてくれのではないかと心密にかすかな希望を抱いている。しかし神は以前として詩人のためには何ら行動を開始してはくれない。刻一刻と迫る死を前にして、詩人は無言の神に苛立ちを感じる。身動きのできない詩人は天上にいる神を自分からは見上げることすらできない。全く無力な詩人はそれでも決して救いの希望を捨てはしない。罪深い詩人にも神は恩恵を与えることができるからである。

Onely thou art above, and when towards thee/By
thy leave I can looke, I rise againe;/But our
old subtle foe so tempteth me,/That not one
houre I can my selfe sustaine;/Thy Grace may
wing me to prevent his art/And thou like Adamant
draw mine iron heart. (ll.9-14)

神の許しを得得のみ詩人は神を仰ぎ見ることができ、それによってかろうじて詩人は立ち上がることができる。しかし一方でサタンの誘惑があり詩人は一時も自らを支えることができない。詩人の最後の希望は神の恩恵である。恩恵によって詩人はサタンから逃れ、くちかけた神の作品たる詩人も再生できるのである。ダンは最後に恩恵を持ち出し、神への全面的な依存により救いの希望を見いだそうとする。神の恩恵は『聖なるソネット』では詩人の功德によって与えられるのではない。恩恵は全く神の恣意的な行いであり、詩人は果たして不可解な神によって恩恵が自分に与えられるかについては何も言うことができない。ダンの神がカルヴィンのと言われるゆえんがここにある。いずれにせよこのソネットでも前半での詩人の腐敗、死からの救いに関しての神への訴えから後半での神への絶対的な依存への変化が見られ、詩人の主張が神の恩恵の前で消滅してしまうという構造を有している。

これまでダンの詩に理性と信仰がどのように表れているかを見てきた。ダンは理性を完全には捨て切れなくて理性に頼りたいと思う気持ちがあると同時に又信仰にも依存したい気持ちがあり、どちらにも完全にコミットできないでいる。『聖なるソネット』では理性が信仰によって最終的には取って代わられるが、しかし詩人の理性は十分にその痕跡を残している。ダンは終始理性を捨てて信仰だけにすがるという態度はとることができなかった。これはダン自身が厳格なピューリタニズムにもまた楽観的なカトリック教にも共鳴しえなかったことを示しているが、別な見方をすれば強烈な個性と知性を兼ね備えたダンにピューリタンとカトリック教徒的な要素が同居していたとも言えるのである。これまではダンの詩を中心にして理性と信仰の問題を見てきたが、この問題を解明するうえで欠かせないもう一つの詩と散文がある。ジェームズ王の長男のヘンリー皇太子の死を悼む 'Elegie On the untimely Death of the Incomparable Prince, Henry' とダンが英国国教会へ入る前の1615年頃に書いたと思われる『神学論集』(Essays in Divinity) である。『説教集』(Sermons) へ論を移す前にこれらの作品におけるダンの理性と信仰に対する態度を見てみたい。

4

1612年11月6日、ジェームズ王の長男ヘンリーが腸チフスのためわずか18才の若さで死んだ。言わばプロテスタントの希望の星であったヘンリーの死は英国内に大きな波紋を呼び起こし、彼の死を悼む詩が次々と書かれた。ダンのエレジーはそれらの一つであるが、その詩でダンにはヘンリーをキリストの象徴のごとく扱い、ヘンリーの死は世界に大変動をもたらし、ダンの信仰も理性も混乱をきたしていると言う。

Look to Me, *Faith*; and look to my *Faith*,
God: / For, both my *Centers* feel This *Period*.

(ll.1-2)⁽¹⁷⁾

冒頭の「信仰よ、私を支えてくれ。神よ、私の信仰を支えてくれ」がこの詩が devotional な性格を有し、ヘンリーの死が信仰と密接な関係にあることを示している。この詩はヘンリーの死を直接そのテーマとしているが、コペルニクスとケプラーの「新哲学」を利用しつつ地球と太陽との関係さらには人間と神の子キリストとの関係をも扱っている。ヘンリーの死はダンの理性と信仰という二つの中心に大きな影響を与えるのであるが、ダンには信仰と理性を次のように定義する。

Of *Waight*, one *Centre*; one of *Greatness* is: / And Reason is That *Centre*; *Faith* is This. / For into' our Reason flowe, and there doe end, / All that this naturall World doth comprehend; / *Quotidian* things, and Equi-distant hence, Shut-in for Men in one *Circumference*: / But, for th' enormous *Greatnesses*, which are / So disproportion'd and so angulare, / As is God's *Essence*, *Place*, and *Providence*, / Where, How, When, What, Soules do departed hence, / These *Things* (*Eccentricque* else) on *Faith* do strike; / Yet neither All, nor upon all alike: / For, Reason, put t^her best *Extension*, / Almost meetes *Faith*, and makes both *Centres* one: (ll.3-16)

理性を 'waight' の中心、信仰を 'greatness' の中心ととらえ、量と質から理性と信仰を定義する。量的な 'waight' としての理性はいわば可視的な世界に属し、自然界に存在するすべてが理性の対象となる、

それは誰でもが眼に見える対象であり、自ずからそれ自身限界を有することになる。それに反し質的な性格を有する信仰は 'waight' のように計測することはできず、限界はない。ダンはよく好んで使用する円という具体的なイメージを使い、理性の対象は一つの周辺のかなかに閉じ込められたありふれた事柄と円の中心から同距離にある事物であると言う。しかし神の本質、場所、摂理、魂がこの世を去るときの状態に関しては相対的な関係もなく又円周のなかに含まれることもない。神の本性はその中心に至るところにあり、円周はどこにもないと言われているが、信仰も中心に至る所にあり、円周はどこにもなく、無限である。それに反し理性の領域は円周によって囲まれており、それ故有限で、この世に関するすべてがその対象となる。有限の理性、無限の信仰、ダンはこのように理性と信仰に対する見解を明らかにする。13行までダンは理性と信仰の領域をそれぞれ定め、両者が全く相反する領域に留まり、全然接点がないかのように言うが14行に至って神の本質、場所、摂理や魂がこの世を去るときの状態に関する事柄はすべてが信仰の対象ではなく、また同じように信仰を必要とはしないと言っているのである。そしてその後ダンは「理性は最大限に行使されるとほとんど信仰と出会い、二つの中心を一つにする」と言う。ヘンリーの死は理性と信仰の調和を崩壊せしめたが、ヘンリーという人間を通して理性と信仰の調和が再び可能となるのである。上記の2行は理性が信仰と同じことをなしえるということ、つまり信仰の世界にすら理性の入り込む余地はあり、理性は信仰を支えることができることを意味している。このような見解はこれまで見てきた理性と信仰を互いに排斥しあうことなく調和させようとするダンの理性・信仰観を継承していると見ることができるだろう。この詩ではヘンリーが理性と信仰の接点の役を果たし、ヘンリーには理性の科学的能力によって把握される 'Quotidian things' (l.7) と信仰の神学的能力によって把握される 'Gods essence, place and providence' (l.11) が同居しており、言わば有限と無限、俗と聖、時間と永遠が一致しているのである。ここで特に注意を要するのはダンが自然界を認識する手段として理性を認めていることなのである。言うなればダンは自然科学に対して否定的な立場を取らず、むしろ理性の使用によって自然界の探究は可能であることを示唆しているのである。このように理性と信仰にはそれぞれの領域があ

ることをダンは認め、理性を否定する懐疑主義的な態度を示しはしない。このように考えるとイトラトーフセイン (Itrat-Husain) の見解⁽¹⁸⁾つまり理性の不十分さがダンをして神秘主義へと導き、ダンは知的な確信や推論によってではなく神秘的信仰によって救済に対して穏健な確信を得たとの見方はそのまま肯首できなくなってくる。ダンは、理性が宗教では限界があることを十分に認識していたがかといて理性に対して懐疑的な態度をとり、その反動として信仰の世界に入るということはない。ダンにはこれまで見てきたように理性を完全に捨て去ることはできなかった。

ヘンリーへのエレジーにおける同じようなダンの態度はダンが英国国教会へ入る前の1615年頃書かれたと思われる『神学論集』⁽¹⁹⁾にも明確に述べられている。この作品は第一部では創世記第一章第一節の “In the beginning God created Heaven and Earth” を取り上げ、聖書、モーゼ、創世紀、神、神の名、エロヒムについて論じ、一つの祈りが最後に来る。第二部では出エジプト記の第一章第一節の “Now these are the names of the children of Israel which came into Egypt” を取り上げ、名前の多様性、数、数の多様性について論じ、最後に四つの祈りが来る。以上のような構成をもつ『神学論集』においても理性と信仰の調和を求めながらも信仰を宗教の領域においては優位に考え、最後に創世記と出エジプト記をダン自身に適応し、神への全面的依存によって自らの苦境からの脱出を計るのである。ダンが本書において全く理性を否定していないことは例えば次の一節をみれば容易に理解できよう

for though our supreme Court in such cases[as where any profane Historie rises up against any place of Scripture, accusing it to Humane Reason and understanding], for the last Appeal be Faith, yet Reason is her Delegate,... (p.56)

ダンは訴訟事件のイメージを使用し、聖書の記事に関して世俗史が反論し、理性へ告訴するような訴訟事件では最後の控訴に関して最高裁判所は信仰であるが理性は信仰の使節であると述べるとき、信仰に先立って理性もその力を発揮できることを示唆している。あるいは神学の探究は謙虚さをもって行われるべきであるが、理性の働きを消し去るような「這いつくばりような、凍った、愚かな謙虚」であってはならないし、神

の秘密の探究をおろそかにするような謙虚ではあってはならないとも言う。

Where this Humility is, *ibi Sapiencia*. Therefore it is not such a groveling, frozen, and stupid Humility, as should quench the activity of our understanding, or make us neglect the Search of those Secrets of God, which are accessible. (p.5)

最後の「神の秘密は手に入れることができる」は『風刺詩第三番』を思いおこさせるが、ここでは『風刺詩第三番』とは異なり謙虚を伴った信仰 (Sapiencia) によって可能なのである。理性を捨て信仰だけに頼っては神の探究は完全とは言えないというわけである。次の一節では信仰心に富む心は時には理性に向くが決して神から遠ざかるのではなく常に神を向いていると言う。

And though the faithfulest heart is not ever directly, and constantly upon God, but that it sometimes descends also to Reason; yet it is <not> thereby so departed from him, but that it still looks towards him, though not fully to him ...By this faith, as by reason, I know, that God is all that all men can say of all Good.

(pp.20-21)

このようにダンは『神学論集』では理性を否定することはしない。むしろ理性と信仰との両立、調和をめざすのである。ダンはアウグスティヌスの『告白』の一部を引用した後で「神が信仰で満たしたアウグスティヌスは理性と理解を望んだ」⁽²⁰⁾と述べ、信仰は理性を伴うと神へのより深い意味に到達でき、信じるためには理解することが不可欠であることを示している。また知性主義の代表たるアキナスにも言及し、なにもものアキナスの知性の探究には不可能なものではなかったとアキナスを賞賛するが、そのアキナスですら世界の始まりに関しては信仰箇条であると言っているのである。⁽²¹⁾ダンはかくして理性を消し去り、信仰にのみ依存しようとする態度は示さない。ただ「怠惰な信仰」 (a lazy faith)⁽²²⁾のなかでまどろむこと、つまり理性を少しも働かせないで受動的な信仰を甘受することを最も警戒しているのである。アウグスティヌスもアキナスも単にやにくもに理性をかざすことに終始したの

ではない。彼らには理性とそれに信仰があった。信仰を欠く理性はダンにあっては「好奇心」(curiosity)を意味する。『神学論集』でダンはしきりに「好奇心」を批判するが、それも「好奇心」が‘Pride’ (the Author of Heresie and Schism)⁽²³⁾を引き起こすからである。ではこの「好奇心」が嵩じるとどうなるか。聖書に関して言えば、それは聖書を損ねてしまうことになり、結局は真理を疑い、論ずることにより我々の魂をも殺してしまうことになる。

For we kill our own souls certainly, when we seek passionately to draw truth into doubt and disputation. (p.39)

それ故単に自らの機知を誇示・誇張するために文から一、二語重要でない語を引用し、文字を引き離し、強引に自らの目的に従わせる人々をダンに容認できない。彼らは最終的には神の言葉を神の言葉とせず、神を神とすることはない。

They therefore which stub up these severall roots, and mangle them into chips, in making the word of God not such, ... they, I say, do what they can this way, to make God, whose word it is pretended to be, no God. (pp.39-40)

そして好奇心に満ちた虚栄や過度は我々の眼を盲目にするほどの塵をまくことになる。

...these [curious vanities and excesses] ... may so bruse them [the Scriptures], and raise so much dust, as may blinde our Eyes, and make us see nothing, by coveting too much. (p.41)

好奇心は言わば風によってふくらむ袋 (bladder) のようなもので、ただふくらむだけでいずれは破裂する。実体がないから浮遊するだけで、真理からは遠ざかっていくだけである。ダンにとっては ‘bladder’ は人間知識の本性であるが⁽²⁴⁾、信仰を伴わない理性はまさに ‘bladder’ である。ダンには又 ‘an humble and diligent understanding’⁽²⁵⁾ には神の霊は何も虚偽は行わないと言うが、単なる好奇心には ‘humble’ と ‘diligent’ が欠けているのである。その典型がピコ・デラ・ミランドラである。‘a man of an incontinent wit, and subject to the concupiscence of inaccessible

knowledges and transcendencies’⁽²⁶⁾であるピコが何を行ったかと言えば創世記の冒頭の ‘In the beginning’ を表すヘブライ語の ‘Bresit’ の文字を転置したりアナグラム化したりしてキリスト教の大意を引き出したのである。このような方法を批判してダンは、神は完全な書を我々に与えたのだからそれをひき裂いたり、ちぎったりする必要はないと言う。

But since our merciful God hath afforded us the whole and intire book, why should we tear it into rags, or rent the seamless garmament? (p. 14)

ダンは「神を学ぶことは謙虚でありしかも不思議な奇跡的な謙虚である」⁽²⁷⁾と言っているが、ただ好奇心を満たすピコのような方法は ‘wit’ を誇示するだけで「謙虚」を欠いているというのである。ダンによれば ‘wit’ と ‘an humble and diligent understanding’ は異なり、後者には ‘wit’ にはない ‘faith’ が含まれているのである。ダンは『神学論集』ではこのようにしきりに「好奇心」にかられた聖書の探究を退けようとするが、しかしそう言うダンにもかなり ‘curious’ などころがあり、たとえば聖書に見られる70という数字について ‘overcurious and Mysterious consideration’⁽²⁸⁾ 自ら行っているのである。最終的には ‘curiosity’ への誘惑を「謙虚」が引きとどめているが、ダンのピコの ‘extream learning’⁽²⁹⁾ や ‘that transcending Wit’⁽³⁰⁾ と呼んだフランシス・ジョージ (Francis George) への批判は案外彼らの機知へのダンの羨望の表れであったのかもしれない。いずれにせよダンは機知のための機知、謙虚を伴わない理性の誇示へ批判を向けるが、見方によっては『神学論集』はそれまでの「理性」一辺倒のダンの ‘humble and diligent understanding’ への確信を再確認した書であると言えよう。

ダンはこのように理性と信仰を共に認めるが、理性を欠く信仰、信仰を欠く理性は認めることができない。しかしヘンリーへのエレジーと同様宗教上の問題に関しては信仰に優位が与えられる。ダンは次のように述べて、信仰の重要性を説く。

...to advance Faith duly above Reason, he [Aquinas] assigns this with other mysteries only to her comprehension. For Reason is our Sword, Faith our Target. With that we prevaile

against others, / with this we defend our selves:
And old, well disciplined Armies punished more
severely the loss of this, then that. (p.16)

ダンにはアキナスを援用しつつ、信仰には神秘をあてる。理性は刀、信仰は円盾とアナロジカルに論を進め、我々は刀で的を攻撃し円盾で我々を防御するが、兵士にあっては身を守る円盾が攻撃する刀より重要であるのと同じように、信仰が理性よりは重要であると述べている。更に天地創造の始まりに関しての信仰と理性の役割についてダンは次のように述べる。

That then this Beginning *was*, is matter of *faith*, and so, infallible. *When* it was, is matter of *reason*, and therefore various and perplexed. (p.18)

天地創造が実際に存在したことは信仰問題であり、全く誤りのないことであり、それがいつ存在したかは理性の問題であり、それ故様々な意見があり、複雑な問題であると述べる。天地創造に関しては次のようにも述べて、信仰によってしか天地創造は理解できず、この世の始まりがあったということそしてその前は無であったと言う。

we must returne again to our strong hold, *faith*, and end with this, *That this Beginning was, and before it, Nothing*. (p.19)

あるいは神の創造に関しては理性ではなく信仰によってただちに飲み込まれなくてはならないとも言う。

...his [God's] great work of Creation, which admits no arrest for our Reason, nor gradation for our discourse, but must be at once swallowed and devour'd by faith, without mastication or digestion. (p.54)

同様に世界の始まりに関しては、それは説得、議論、証明等の対象ではなく、突然の即座の信仰の支配のもとにあるのだと言い、理性よりは信仰の対象であることを強調する。

And therefore for this point [that the world began], we are not under the insinuations and mollifyings of perswasion, and conveniency: nor

under the reach and violence of Argument, or Demonstration, or Necessity; but under the Spirituall, and peaceable Tyranny, and easie yoke of sudden and present Faith. (p.16)

理性を超える宗教上の諸問題についてダンは信仰に訴えるが、このような態度は終始変わることがなく、例えば「命の書」についても人間の知識ではどうにもならず不可能である。そして宗教の諸神秘に無理に足を踏み入れたり「命の書」に侵入したりしてはいけない。

So far removed from the search of learning are those eternall Decrees and Rolls of God,... (p.7)

yet the Church has wisely hedged us in so farr, that all men may know, and cultivate, and manure their own part, and not adventure upon great reserv'd mysteries, nor trespass upon this book [of life], without inward humility, and outward in terpretation. (p.7)

このように信仰には信仰にふさわしい領域をダンは認め、理性を超える問題については信仰に訴えるのである。同様に神の「義認」(justification) について問うことは人知では測り難い。

To enquire further the way and manner by which God makes a few do acceptable works; how out of a corrupt lumpe he selects and purifies a few, is but a stumbling block and a tentation. (p.87)

次の一節では理性によって神を求める人を評して次のように言う。

Men which seek God by reason, and naturall strength, (though we do not deny common notions and generall impressions of a sovereign power) are like Mariners which voyaged before the invention of the Compass, which were but Costers, and unwillingly left the sight of the land. (p.20)

理性や自然の力によって神を捜し求める人は羅針盤発明以前の水夫で沿岸航海者にすぎず、島は発見できないが、理性という 'sovereign power' をダンは否定していないことに注意したい。これに対し信仰によって神を求める人を羅針盤の使用によって航海した人々にたとえ（たとえばユリシーズは羅針盤によって新世界を発見した）我々の心が信仰に触れるや否や理性には不可能な神の本質と新しいエルサレルを発見するにいたる。

But as by the use of the Compasse, men safely dispatch *Ulyses* dangerous ten years travell in so many dayes, and have found out a new world richer then the old; so doth Faith, as soon as our hearts are touched with it, direct and inform us in that great search of the discovery of Gods Essence, and the new *Hierusalem*, which Reason doth not attempt. (p.20)

信仰は言わば眼には見えない神を誤りなく差し示してくれる羅針盤なのである。そして知識の獲得は段階的で継続的であるが、神は分割不可能で信仰だけがそのような神を理解しえる。

For all acquired knowledge is by degrees, and successive; but God is impartible, and only faith which can receive it all at once, can comprehend him. (p.21)

このようにダンは理性よりも信仰によって神をとらえようとしていることがわかる。ヘンリーへのエレジーにおけると同様ダンも理性の宗教における限界を十分に認識しており、理性を全く否定するわけではないが、信仰をより重視する態度をとっているのである。ダン『神学論集』では理性や機知に富んだ議論を展開し、創世記や出エジプト記を論じたい誘惑に常にかかられているが、しかし彼の神の前での謙虚さが論争とキリスト教をいたずらに振り回すことを回避させている。『神学論集』におけるダンの博学からしてダンが容易に謙虚の名の下に理性の使用を中止するとは考えられない。ダンも意図的に謙虚になり、宗教上の問題を敬けんな態度で受入ようとするが、その裏にはぎらぎらと光るダンの理性の刃が絶えず見え隠れしているのである。それはやはりカトリック教とピューリタニズム

から英国国教会を擁護しようとするダンの意図の表れであろう。ダン自らが理性を盾に宗教論争に入ればキリスト世界は一層泥沼に陥ることになる。全てのキリスト教徒が謙虚になればキリスト教の分裂は回避でき、一つにまとまることも可能であるとダンは楽観的に考えているようだ。楽観的ではあるがしかし理想としては考えられなくもない。ダンは救済は救世主の約束への信仰からきたと言いが⁽³¹⁾、それを信じるのもすべて謙虚によると言いたいのである。キリスト教が東西に分裂しようが根底においては一致し、キリストという同じ土壌から滋養を吸収しているとも言いが⁽³²⁾、現状はそれとは程遠くいかに多くの宗派がそれぞれのかたくなな信念に基づき、一層の宗派分裂や 'controverted divinity'⁽³³⁾ を引き起こしていることであろうか。

『神学論集』においてダンは英国国教会への入会に際し心の準備をしておく必要があったわけであり、その意味でもダンの謙虚振りはややわざとらしが感じられないこともない。ダンの謙虚な態度、神への依存をよりよく示しているのは各部の終わりの祈りである。この祈りにおいてダンは『聖なるソネット』の世界を再現しており、必死に自己の再生を願い、神の助けを求めるのである。第一部の祈りでダンは神の訪れの時を魂の回宗の始まりとし、「困惑」、「暗黒」、「不毛」を振り落とし、神にふさわしい「思い」、「言葉」、「行為」をもたらせよと訴える。

...though this soul of mine, by which I partake thee, begin not now, yet let this minute, O God, this happy minute of thy visitation, be the beginning of her conversion, and shaking away confusion, darkness and barrenness; and let her now produce Creatures, thoughts, words, and deeds agreeable to thee. (p.37)

ダンは今まで創世記第一章第一節について論じてきたが、それはダンにとっては「困惑」、「暗黒」、「不毛」以外のなにものでもない。論ずれば論ずるほどそれが不毛な論議であり、神の真意からは遠ざかっていくことにダンは気づくのである。神に対してより近づきたい、より奉仕したい、不確かな自己の現状から抜け出て、より確かな神と自己の関係を築きあげたい、ダンは必死に神に対して懇願する。それも神と神の言葉への全面的依存なくしてはありえない。

Yet since my soul is sent immediately from thee [God], let me (for her return) rely not principally, but wholly upon thee and thy word. (p.38)

ダン自身の力では現在の苦境から逃れることはできず、神の助けが必要である。このような神への依存を阻んでいるのはしかし罪なのである。第二部の出エジプト記を扱うに至り、ダンの神への依存、罪意識は一段と強くなっていく。ダンはプロテスタントらしく聖書の自己への適応を試みるが、ダンにとってはエジプトは「自信」、「僭越」、「絶望」、「情欲」、「怠惰」を意味し、そのようなエジプトからダンを神は救ってくれたと言う。

Thou hast delivered me, O God, from the Egypt of confidence and presumption, by interrupting my fortunes, and intercepting my hopes; And from the Egypt of despair by contemplation of thine abundant treasures, and my portion therein; from the Egypt of lust, by confining my affections; and from the monstrous and unnaturall Egypt of painfull and wearisome idleness, by the necessities of domestick and familiar cares and duties. (p.75)

神を全く必要としない自堕落な汚辱にみちた生活に浸りきったダンをすら神は見捨てはせず、逆に神へと眼を向けさせようとする。ダンの心の腐敗が自らをファラオ、エジプトにせしめているが、それでも神はダンを見離しはしない。神の霊はダンのなかに住み、神の merit を適応することにより、ダンはファラオからキリストになり、神がダンの薬となることに甘んじ、ダンを医者とならしめ、ダンは神の犠牲のもとに自らの心の病をいやすのである。神を少しもかえりみず、自暴自棄の生活におぼれるダンにすら神は救いの手を差し伸べ、絶望の淵から救い上げるのである。

But, O God, as mine inward corruptions have made me mine own *Pharaoh*, and mine own *Egypt*; so thou, by the inhabitation of thy Spirit, and application of thy merit, hast made me mine own Christ; and contenting thy self with being my Medicine, allowest me to be my Physician. (pp.75-76)

罪にまみれたダンは言わば「エジプト」から「カナン」

へと精神的な progress を歩むことにより、自己再生を完成させるが、その主導権はあくまでも神にある。神は“Out of Egypt have I called thy Son”と言い、その約束を果たしたように、神はその選んだ人すべてに自らの約束を果たすと言う。⁽³⁴⁾その選びに関してダン自身が全然関与できないかというところではなく、「恩恵」と「自然」の融和を説き、⁽³⁵⁾「神も人間も人間の意志を決定はしない……神と人間が協力して人間の意志を決定する」⁽³⁶⁾と言っていることから明らかなように、ダンは人間の自由意志を認めているのである。怒れる、不可解な神の前にひれふす全くなすすべもなく神に隷属する人間にダンは同意しない。宗教詩で見た「主張」と「服従」はこのような形で『神学論集』にもその痕跡を残しているのである。しかし全体的にみると『神学論集』でダンは「主張」をできるだけおさえ、「服従」をより強調している。ダンは出エジプト記を自己に適応し、神がダンを「エジプト」から救ってくれることに疑いをなげかけないのもダンの神への「服従」を強く表したいがために他ならない。このようなダンの神への服従的精神は「祈り」でより著しくなる。四つの祈りでダンはそれまでの感情を殺した文体から一気に激しい感情の文体へと転じ、神がダンの「エクソダス」と「救出」を早めてくれよう願う。そのためにダンは神の「慈悲」、「力」、「公正」、及び自らの「罪」を「謙虚に認め、告白する」のである。しかしそれでも神への献身とダン自身の腐敗がダンのなかで同居し続ける。これはまさに『聖なるソネット』の世界であるが、ダンの腐敗、内なる「ファラオ」が神への敬虔な献身、愛情を消し去ってしまう。しかし神は絶えずダンの不具を直し、視力を回復させ、「エジプト」から救ってくれるのみならず罪の死かも立ち上がらせてくれる。そしてダンの罪の故に神がダンにまで舞い降り、多くの不従順、疑い深さ、不平を取り除いてくれるのである。

For hourly thou [God] rectifiest my lameness, hourly thou restorest my sight, and hourly not only deliverest me from the Egypt, but raisest me from the death of sin. My sin, O God, hath not onely caused thy descent hither, and passion here; but by it I am become that hell into which thou descendest after thy Passion; yea, after thy glorification: for hourly thou in

thy Spirit descendest into my heart, to overthrow there Legions of spirits of Disobedience, and Incredulity, and Murmuring. (pp.96-97)

罪深いダンに対して神は無償で罪を取り除き、立ち直させてようとする。しかしダンはそのような無私な神に逆らい、反抗しせっかくの神の善意を無に帰してしまふ。神はダンの心に多くのろうそく、ランプをともしてくれたが、それを吹き消すか悪用してしまふ。あるいは神はダンに知識欲を与えてくれたが、その知識でダンに神に対して武装してしまい、神を受けつけなくなってしまう。ダンはこのように神の慈悲を受け入れたいのだが、かたくなな罪、神への反逆心のために自己を神に明け渡すことができない。次の一節でもダンは神の霊の宿る身体である神殿を世俗に、肉体を肉欲へ、神の要塞を敵に、魂をサタンに渡してしまっている。

We have betrayed thy [God's] Temples to prophaness, our bodies to sensuality, thy fortresses to thine enemy, our soules to Satan. (p.98)

あるいは神への約束を果たしもせず、何度も悔いた罪に何度も陥ってしまう。

yea we renounce all confidence even in our repentances, for we have found by many lamentable experiences, that we never perform our promises to thee, never perfect our purposes in our selves, but relapse again and again into those sins which again and again we have repented. (p.99)

神を認めたいという本心とは裏腹にダンはますます神から離れていく。神を受け入れたいと思う気持ちが強くなればなるほどダンの気持ちは逆の方向へ向かう。サタンによる誘惑が神への接近を阻止するが、そのような状態が尋常ならざるものであることをダンは十分に承知しており、その尋常ならざる状態を尋常へと引き戻してくれるのは他でもない神であることも又ダンは知っている。ダンは「これらの異常な状態を真実で完全な調和である神だけが調律し、矯正し、整然とすることができる」と言うが、⁹⁷⁾神から離れ、意図的に神に刃向かうダンを最後には神が救ってくれるのである。

祈りのなかでダンは最後まで神とは相対立したままであるが、対立しあう緊迫感からのダンの神への訴えはさらにその度を増ことになる。ダンは最後に「神が我々を敵ではあるが和解したものとして慈悲深く今受け入れてくれるという保証を我々の心のなかに刻印して下さい」⁹⁸⁾と神に願うが、ここでもダンは神が救いの手を差し延べるのを待つだけである。祈りの前の本論でダンの姿勢は理性によって理解できない宗教上の神秘を信仰によって受け入れるというものであったが、その信仰重視の態度がこの祈りにも見られ、ピューリタンのような信仰のみという厳格な見解は取らないが、信仰を通して神の恩恵を受けいれようとする。『聖なるソネット』で見たダンの「主張」と「従順」はここでは「従順」に強調が置かれているが、その「従順」の背後には又謙虚に自らを神と和解させることを阻むダンのかたくなな意志が見え隠れしているのである。『神学論集』は形は「論集」であるが、激しい感情を内に秘めるダンは自己の神との関係を創世記と出エジプト記を自己に適応し、自らの精神的苦悩からの脱出をはかるだけでなく、自己再生の訴えを神に吐露する祈りのなかで何よりも神の援助なくしてはその脱出も自己再生もありえないことを強調するのである。

5

これまで見てきた宗教詩や散文からダンの理性と信仰についての態度はかなり明確になってきた。1590年代の『風刺詩第三番』の自信に満ちた真の宗教探究から宗教詩を経て『神学論集』まで、ダンには消し去ることのできない理性が一貫して流れており、その理性を捨てて神に自己を投げ出したい気持ちがある反面絶えず消えることのない理性が又ダンを引き寄せ、そのような理性と信仰との間の微妙な葛藤が宗教詩の特徴の一つでもあった。そして理性と信仰によってダンは神への接近を試み、理性によって理解できない問題が生じると信仰に依存し、信仰をより重視していた。以上がこれまでダンの作品を論じることから明らかになった点である。本論の最後にダンの『説教集』へと論を移したいが、ダンはより詳細に理性と信仰に対して自己の態度を明らかにし、独自の理性・信仰観を展開することになる。

『説教集』においてダンの理性と信仰の働きについてはこれまで見たヘンリーへのエレジーや『神学論集』

以上に徹底しており、宗教上の諸神秘のような理性の限界を超える問題には信仰をあてがう。例えば以下のように、宗教上の問題には信仰を行使し、我々の理性を超えることを信仰の対象とする。

In divine matters there is principally exercise of our *faith*, that which we understand not, we believe. (III,183)

「宗教上の問題点」は何かと言えばそれはキリストが述べたことで、信仰の行使によってのみ理解されることであり、人々が好奇心から議論することは理性の行使によって把握される。

That which Christ hath plainly delivered, is the exercise of my Faith; that which other men have curiously disputed, is the exercise of my understanding. (III,207-8)

理性によって理解できないことを信仰によって理解するという考えはダンの終始一貫変わらぬ見解で、『説教集』の随所に見られるものであるが、次の一節では「理性」によって理解できない救済を「神秘」であると言い、それを自然、学識、国家、あるいは個人的感覚ではなく教会や信仰によって理解すると言う。

that which I cannot understand by reason, but by especiall assistance from God, all that is Prophecy; no Scripture is of private interpretation. I see not this mystery [of salvation] by the eye of Nature, of Learning, of State, of mine owne private sense; but I see it by the eye of the Church, by the light of *Faith*, that's true; but yet organically, instrumentally, by the eye of the Church. (III, 210)

このほかにもダンは宗教の神秘として復活をあげるが、それは自然や哲学では理解できない。

It is the Christian Church, that hath delivered to us the article of the resurrection. Nature says it not, Philosophy says it not, it is the language and the Idiotisme of the Church of God, that the resurrection is to be beleaved as an article of faith. (III,94)

あるいは復活の根本は信仰にあり、自然理性からの結論ではなく、超自然的信仰箇条である。

And therefore, as in our first part, which will be, By what means the knowledge and assurance of the Resurrection of the body accrues to us, we shall see, that though it be pretended by Reason before, and illustrated by Reason after, yet the roote and foundation thereof is in Faith; though Reason may chafe the wax, yet Faith imprints the seale, (for the Resurrection is not a conclusion out of naturall Reason, but it is an article of supernaturall Faith; (VII,95)

以下では復活は神秘であり、聖なる秘密であり、理性の探究を超えていると言う。

The resurrection was always a mystery in it selfe: *Sacrum secretum*, a holy secret, and above the search of reason. (VII,98)

So then, the knowledge of the resurrection in it selfe, is a mystery removed out of the Spheare, and latitude of reason. (VII,99)

このようにダンは復活を神秘とみなし、理性ではどうすることもできず、信仰による以外は方法はないと繰り返す。復活と同様ダンが神秘とみなす三位一体についてもダンの態度は変わらない。例えば次の一節では三位一体を理性で理解しようとするとは理性は混乱すると言い、『連禱』と同様、三位一体は理性では把握できないと言う。

If we think to see this mystery of the Trinity, by the light of reason, *Dimitemus*, we shall lose that hold which we had before, our naturall faculties, our reason will be perplext; and infeeble, and our supernaturall, our faith not stenghtened that way. (VII,54-5)

また三位一体は近づきたい光で、信仰の光以外のどんな他の光にも近づくことはできない。

For the Trinity it selfe, it is *Lux*, but *Lux inaccessibilis*; It is light, for a child at Baptisme professes to see it; but then, it is so accessible a light, as that if we will make naturall reason our *Medium*, to discern it by, it will fall within that of *David*,...God hath made darknesse his secret place; God, as God, will be seen in the creature; There, in the creature he is light; light accessible to our reason; but God, in the Trinity, is open to no other light, then the light of faith. (VIII,54)

信仰の世界には証明は必要ない。しかし神秘の世界に理性による証明を適応しなければ満足しない人がある。三位一体のような神秘を人間理性によって証明をしようとすればその威厳は弱まってしまうのである。

For, we have had *voces de terra*, voyces of men, who have indeed but diminished the dignity of the Doctrine of the Trinity, by going about to prove it by humane reason, or to illustrate it by weak and low comparisons; (VI,134)

ダンはこのように復活や三位一体を神秘とみなし、⁽³⁹⁾そこには理性や証明の立ち入る余地はなく、信仰にしか頼ることはできないと考える。次の一節でははっきりと宗教の神秘は理性の対象ではなく、信仰によって神の意志や目的を信じると言う。

And therefore as the *Mysteries* of our *Religion*, are *not* the *objects* of our *reason*, but by *faith* we rest on *Gods decrees* and purpose. (X,237)

神秘の世界を理性によって近づこうとする人は‘curious’で、ダンはこの「好奇心」を『神学論集』におけると同様特に批判する。好奇心とは知識のための知識、知識の目的を神の栄光とせず、隠された神秘を理解しようとすることであり (IV,142-3)、復活や三位一体を理性によって詮索の対象とすることはまさに「好奇心」に他ならない。好奇心の強い人たちの宗教の基礎を捨て去るほど思索的な微妙さに労を費やす危険な嘔吐と人間の本性や義務を忘れるほど神の本性や隠れた目的を調べる鋭敏な飽満を批判して次のように言う。

Curious men busie themselves so much upon speculative subtilties, as that they desert, and abandon the solid foundations of Religion, and that is a dangerous vomit; To search so farre into the nature, and unrevealed purposes of God, as to forget the nature, and duties of man, that is a shrewd surfet, though of hony, and, a dangerous vomit. (IX,134)

好奇心にみちた人は神の隠したもので詮索する人であるが、そのような神の隠れた神秘にまで立ち入る知識を身につけることは体に良くない飽満でやがては体を危険な状態にするほど身に付けた知識を吐き出してしまうことになる。ダンはパラドキシカルに神の神秘を探ろうとしないことは「有益な、健全な、知ある無知である」と言うが (IX,234)、必要以上に神の神秘に立ち入らない謙虚な姿勢もまた宗教に関しては重要なのである。それ故ダンは神の隠れた秘密をさぐることなく宗教の神秘を信仰深く信じて神の恩恵の働きを受けることはキリスト教徒にはふさわしいことで、神が行う方法を問うことは憎むべき、いまましい単音節語であるとのルターを引用さえしている。(IX,246) 神の行動の理由をたずねることも同様で、「なぜ」は神を怒らせ、我々を破滅させると言う。そしてアウグスティヌスを援用して「なぜ神がなにかを命令するのは神自身が知っている。我々の義務はなぜかを問うことでなく神が命ずることを実行することである」と言い (VI,188-9)、好奇心によっていたずらに神の意図を探ることを特に批判する。このようにダンは『説教集』で繰り返し神の隠れた神秘に関して好奇心を働かせて深入りしないように説く。そして理性によって理解できないことには信仰をあてがい、宗教を強引に理性の世界に引き降ろすことを避けようとする。理性や哲学や道徳にいかにか聖書が合致するかをためすために聖書をそれらに投げたりに聖書が理性と一致するかぎり信ずるならば聖書は手が届かずまた利用も出なくなると言う。

The Scripture will be out of thy reach, and out of thy use, if thou cast and scatter them upon reason, upon philosophy, upon morality, to try how with thy reason; (II,308)

又キリストと信仰という超自然的な光を理性の光が消し去る危険性があるとも言う。

When we bring this light [of Christ and faith] to the common light of reason, to our inferences, and consequences, it may be in danger to vanish itself, and perhaps extinguish our reason too: we may search so far, and reason so long of *faith* and *grace*, as that we may lose not only them, but even our reason too, and sooner become mad than good. (III,357)

このような見解は『神学論集』を思いおこさせるが、更に『説教集』では『神学論集』と同じように「謙虚」を強調する。船のバランスをとるために船荷が必要であるように、我々にも謙虚という船荷が必要で、過度の知識のための知識、神の神秘を探ろうとする好奇心に満ちた知識では船たる人間は倒れてしまうと言う。

Let humility be thy ballast, and necessary knowledge thy freight; for there is an overfulness of knowledge, which forces a vomit, a vomit of opprobrious and contumelious speeches, a belching and spitting of the name of Heretique and Schismaticque, and a loss of charity for matters that are not of faith; and from this vomitting comes emptiness, The more disputing, the less beleiving: (III,240)

過度の知識は空気袋のごとくふくらみ、ふくらみに耐え切れないと侮蔑的な傲慢な言葉を吐き出し、異教徒や宗派分離者の名を吐き、信仰問題への寛大さも失ってしまい、ただ論争するだけですます信じられなくなってしまう危険性をダンは述べるのである。論争回避の姿勢は『神学論集』でも見られたが、『説教集』でも論争を厳しく批判する。次の一節では口論しあう論争によってが神が中心におく事柄を周辺に、理性の光と証言へと追いやっていると言う。

They [who think themselves sharp-sighted and wise enough, to search into those unreveal'd Decrees] will needs take up red hot Irons, with their bare fingers, without tongs. That which is in the centre, which should rest, and lie still, in this peace, That it is so, because it is the will of God, that it should be so; they

think to toss and tumble that up, to the Circumference, to the Light and Evidence of their Reason, by their wrangling Disputations. (I,170)

神の隠れた意志を探る人は素手で熱い鉄を拾い上げるようなもので、危険が伴うことは必死である。神の意志には触れないのが最善の策で、中心でじっとしているものを無理矢理周辺へ追いやることはないのである。このような論理を押し進めれば神の意志については語る必要はなくなるが、実際ダンは神、神の本性、本質、隠された意志、秘密の目的については最も語らない人が最もよく賛美するとさえ言うのである。(IX,134) 神の不可解性についてダンははっきりと人間の理性には限界があり、神や神の本質、秘密の目的は人間の理性ではどうにもならないと考える

First, for the incomprehensibleness of God, the understanding of man, hath a limited, a determined latitude; it is an intelligence able to move that Sphear which is fixed to, but could not move a greater: I can comprehend *naturam naturatam*, created nature, but for that *natura naturans*, God himselfe, the understanding of man cannot comprehend. I can see the Sun in a looking-glass, but the nature, and the whole working of the Sun I cannot see in that glasse. I can see God in the creature, but the nature, the essence, the secret purposes of God, I cannot see there. (IX,134)

不完全な理性、宗教における理性の限界を述べるダンから判断するとダンは完全な fideist、信仰主義者のような印象を与え、ピューリタンのと言われても反論ができない。理性の不十分性から反知性主義や神秘主義へと向かったとする Bredvold や Itrat-Husain に同調できもする。しかしダンが人間理性を完全に否定しているのかということ実はそうではなく人間の自然理性の存在を認めているのである。例えばダンは神がこの世に生まれてくる全ての人に注ぐ人間の自然能力について触れるが (IX,382)、理性という共通の光は我々すべてを明るくし、その光によって宗教の神秘を見つけ出そうとする人もいるし、全世界に利益があり有益なものを発見した人もいるとも言う。

So the common light of reason illumines us all; but one employes this light upon the searching of impertinent vanities, another by a better use of the same light, finds out the Mysteries of Religion... Some men by the benefit of this light of Reason, have found out things profitable and usefull to the whole world. (III,359)

理性は人間にあっては信仰より早い生得の共通の自然能力で、「最初の、根源的な光」(III,362)であり、いかなる人間にも本来備わっているのである。そしてその使用いかんによって理性は‘wisdom’にも‘Craft’にもなりえ、貴重な真珠や治療力のあるこはくを発見したり又小石や斑点のついた貝殻を発見することで終わってしまうこともあるのである。(III,359) ダンは他の所でも「理性の魂のない人は人間ではない」とか(VII,188)「人間の本质は理性と理解力である」(I,225)とか言って、あらゆる人間に共通して備わっている理性を強調しているように、ダンは決して自然理性を否定することはない。ダンにあっては理性を欠く人間は動物にも等しいのである。だからダンは盲目的信者と理性的信者に触れ、前者は敵によって簡単に飲み込まれ、征服されやすいが、後者はよくかんで骨を取らなければならず、垣をめぐらした町にいて敵は攻めがたいと言い、盲目的信者つまり無知な信者には理性が必要であることを示唆するのである。

Implicite beleivers, ignorant beleivers, the adversary may swallow; but the understanding beleivers, he must chew, and pick bones, before he come to assimilate him, and make him like himself. The implicite beleivers stands in open field, and the enemy will ride over him easily; the understanding beleiver, is in a fenced town, and he hath outworks to lose, before the town be pressed; that is, reasons to be answered, before his faith be shaken,...(IV,351)

ダンには fideist の一面があることは確かであるが、盲目的に信仰を賞賛するのではないことにも我々は注意を払わなければならない。これはダンの最もダンらしい特徴であるが、ダンの理想とするところは理性に基づく信仰なのである。ダンは次のように理性に基づかない信仰は「いいかげんな意見」であり「信仰」で

はないと言う。

Not that we are bound to believe any thing *against reason*, that is, to believe, we know not why. It is but a slacke opinion, it is not *Beliefe*, that is not grounded upon reason. (III,357)

あるいは盲目的に信じるような信仰を神は要求しないし許もしないし、理性のない信仰は信仰ではなく意見であるとさえ言う。

For God requires no such *faith*, nay he accepts, nay he excuses no such faith, as *beleevæs without reason*; beleevæs he knowes not why. As faith without *fruit*, without *works*, is no faith; so faith without a *root*, without *reason*, is no faith, but an *opinion*. (V,102)

誰でもが生来持っている理性を使用せず盲目的に信仰することをダンは容認しない。⁽⁴⁰⁾更にダンは理性と信仰との関係に独自の見解を打ち出す。それは本来人間に備わっている理性に神が信仰を吹き込むということである。つまり信仰は理性の後に神によってもたらされるというのである。自然理性は十分でないことはあきらかで、その不十分な理性に神が信仰を吹き込むことによってより完全なものにするのである。

The light of *nature* is far from being enough; but, as a *candle* may kindle a *torch*, so into the faculties of nature, well employed, God infuses *faith*. (III,369)

だから理性のない馬やラバには神は信仰を吹き込むことはできない。人間理性は神が種子をまく畑であり、信仰を植え付ける木であると言うのである。

And therefore *Nolite fieri sicut, Be not made like the Horse or the Mule*, in pride, or wantonnesse especially, *Quia non Intellectus*, because then you lose your understanding, and so become absolutely irrecoverable, and leave God nothing to worke upon: For the understanding of man is the field which God sows, and the tree in which he engraffes faith it selfe; and therefore take heed of such a descent, as induces the losse of the understanding,...(IX,382)

又信じることは神への第一歩であるが神が信仰へ来る前に理解することが必要で、神はその理性へ最初に働きかける。(IX,354)ダンは理性が最初で信仰はそのあとにくるといふ考えをもっているが、又宗教の神秘は理解される前に信じられなければならないということと同じだと言う。なぜならば神が自然理性を高めてくれ、その結果神秘を理解するからである。(IX,355)さらに理性は信仰の入り口であり神はそのドアをあけたり閉めたりし、理性によって神は我々を信じらせるにいたるのである。

...for the understanding is the doore of faith, and that doore he [God] opens, and he shuts: So by understanding he brings us to beleeve. (IX,360)

そして神は自然能力(理性)へ超自然的に働きかけ理性によって信仰を伝える。

...for he [God] will worke upon your naturall faculties supernaturally, and by them, convey faith. (IX,370)

このようにダンには理性が信仰よりも先に存在しその理性に神が信仰を注ぎ込むということを経験している。そして信仰によって我々は宗教上の諸神秘を理解し、神へより近づくことができるためにも理性がなによりも絶対必要となる。怠慢・怠惰に盲目的に他人の意見に頼ることは水面に浮かぶ木の葉のように流れに流されるだけであり、理性を用いない人は馬やラバにも等しいとダンが厳しい口調で述べるのも以上の理由によるのである。(IX,385)ダンにあっては理性は信仰の容器なのである。(IX,386)さらに以下ではより明確に理性・知識に支えられた信仰の重要性を述べる。

Knowledge cannot save us, but we cannot be saved without knowledge; Faith is not on this side Knowledge, but beyond it; we must necessarily come to *Knowledge* first, though we must stay at it, when we are come thither. For, a regenerate Christian, being now a *new Creature*, hath a *new facultie of Reason*: and so believeth the Mysteries of Religion, out of another Rea-

son, then as a meere Naturall Man, he believed naturall and morall things. He believeth them for their own sake, by *Faith*, though he take *knowledge* of them before, by that common Reason, and by those humane Argumants, which worke upon other men, in naturall or morall things....So the common light of reason illumines us all; but one imployes this light upon the searching of impertinent vanities, another by a better use of the same light, findes out the My steries of Religion; (II,359)

ここでダンには彼独特の理性観を展開している。⁽⁴¹⁾ダンには 'a new facultie of Reason' と 'that common Reason' の二種類の理性について触れているが、「再生したキリスト教徒は今や新しい被造物なので又新しい理性の能力を有する」という点は特に注目される。即ち、単なる自然人一彼には神の恩恵が欠けている一は「普通の理性」を使って「つまらないくだらない事」を探究するだけであるが再生した、即ち神の恩恵を吹き込まれたキリスト教徒は「新しい理性」によって宗教上の様々な神秘を解明することができるのである。再生した人間には新しい理性が付与されるという考えは更にはダンの「修正された理性」(rectified reason)へと通ずる考えであろう。この「修正された理性」は言わば理性と信仰が一体化したもので、両者が互いの欠点を補うことによりより高度な能力を発揮することができるのである。以下の一節からも明らかのようにこの「修正された理性」にあっては理性と信仰が相接触しあい、お互いを包みあっている。

They are not continuall, but they are contiguous, they flow not from one another, but they touch one another, they are not of a peece, but they enwrap one another, Faith and Reason. (IV,351)

これはヘンリーにささげるエレジーの「理性は最大限に行使されるとほとんど信仰と出会い、(理性と信仰という)二つの中心を一つにする」という表現を思い出させるが、「修正された理性」に至りダンには信仰のみあるいは理性のみといった厳格な態度から共に両者の存在を認めるといふ折衷的な態度を取ることができるようになる。理性を捨て去ろうにも捨て切れず絶え

ず信仰との確執に揺れ動くダンは理性も信仰も同時に容認する「修正された理性」という考えの下によりよく理想の理性・信仰観を打ち立てることができるようになる。信仰によって再生する人は「修正された理性」を所有することになり、普通の理性が成しえた以上のことを成しとげることができる。ダンにとってはすでに述べたように理性は「最初の根源的光」で、全ての人間に共通なものであるが、自然人にあってはその光はそれ以上何ら変化することはない。しかしキリストを信じる者には「最初の根源的な光」—理性—に信仰と恩恵が与えられ、理性に修正が施される。いわゆる自然人には恩恵はなく、神の恩恵を受けない者は自然人と同様である。しかしそのような自然人も信仰によってキリスト教徒になりうる。「信仰によって再生した人間」は当然のことながら「自然人」と対応する言葉であるが、両者を区別するのは「普通の理性」に影響を及ぼすキリストという光から流れ出る信仰と恩恵である。

...and because this light of *faith*, and *grace* flowing from that fountaine of light Christ Jesus, works upon the light of *nature* and *reason*, it may conduce to the raising of your devotion,... (III,362)

確かにダンには理性と信仰を同時に認め、どちらか一方だけを取り入れるということはないが自然と理性にとどまり、「普通の理性」に甘んじる人よりも信仰と恩恵によって「普通の理性」を乗り越える人をより重視しているのである。自然人であるかぎり我々は理性においては赤ん坊にすぎないとある説教で言っているが(IX,100)、理性だけではキリスト教の諸神秘には達しえない。しかし信仰の光と恩恵によっては現世においても神の本質により接近することが可能である。このような信仰をより重く見る態度はダンの神を認識する二つの方法にはっきりと現れている。一方は「作られた自然」のなかに理性の使用により神を見る方法で、それは鏡のなかに反射によって見るようなもので '*obscure representations*', '*a dark representation of God*' による。⁽⁴³⁾『神学論集』でもすべての被造物は神を鏡のように表すがそれを受け入れ、見つめる人間の弱さのために '*glimeringly*' に '*transitorily*' に表すにすぎないと言い、自然の中に神を見る方法の

不十分性について触れているし、⁽⁴⁴⁾上に引用した説教でも被造物の中に神を見ることはできるが、神の本質、本質、隠れた目的は見ることができないとやっている。これに反し現世で神を知る場合は教会でそれは信仰による。理性では単に神を「被造物の書」である自然のなかに見るだけであるが、信仰によれば神を知ることができる。神を「見る」ことと「知る」ことの違いは理性と信仰の違いであり、神を見るだけでは我々の救いにはならない。ダンには神を救済という観点から見るので自然の中に神の偉大な御業を見るだけでは十分とは言えない。理性によって神の偉大な力を見てもそれは信仰によって神の本質を知る知識と比べれば '*infancy*' であり '*cradle*' にすぎない。(VIII,230) 自然のなかに神を見ることは自然人の行うことである。その自然人はしかし信仰を欠くので神の救いという超自然的な御業に対してはなにも行うことはできない。信仰によって神を知るということは単に神を知ることのみならずキリストを我々自身に適應することなのである。理性によって神を見るだけの自然人にはこの適應ができない。このようにダンには理性によって神を見ることを否定はしないが、神を知ることのほうをはるかに重視しているのである。次の一節では適應する信仰によってよりすぐれた知識を有することが可能であると言う。

by the light of Faith, (which is not only a knowing, but an applying, an appropriating of all to thy benefit) he [who has faith] hath a better knowledge then all this, then either *Propheticall*, or *Exangelicall*: (III,365)

ここでダンには信仰を知識と切りはなさずむしろ知識の一部とみなし、そのような信仰によって神の永遠の王国を永遠に所有するのである。「修正された理性」というダン特有の考えは信仰と理性の混合のようなものであるが、そこでもしかし信仰がより重視されている。ダンはある説教で「キリストは理性である。修正された理性である」と述べているが、この考えにたてばキリスト教徒にとってはキリストを理解するには信仰だけでは不十分になってくる。理性に基づいた信仰によって、即ち「修正された理性」がなければキリスト教徒にとっては意味をなさなくなってくる。次の説教では真の理性から生じるより細密な信仰が盲目的な無知に包まれた信仰よりも深く宗教を理解しえると言う。

a narrower faith that proceeds out of a true understanding, shall carry thee farther than a faith that seems larger, but is wrapped up in an implicate ignorance; no man believes profitably, that knows not why he believes. (IX, 356)

ダンが特に懸念するのは何も考えることをしない「盲目的な無知」なのである。キリスト教徒が信じるためには最初に考え、知らなければならない。ただ盲目的に受動的に物事を受け入れるだけでは真の信仰とは言えない。ダンにあっては信仰はあくまでも理性によって裏付けされなければ意味はない。17世紀の世俗化されつつあった時代にあって大きな特徴である理性の重視がダンの信仰観にも少なからず影響を与えているようである。ダンが盲目的な信仰を退けていることについてはすでに触れたが、これは多分に信仰のみというピューリタニズムを意識した発言であろうが、信仰のみでは神への主体性を失い、逆に神への隷従を意味することになる。そのような神への隷従を緩和し人間の主体性を織り込んだのが「修正された理性」という考えである。ダンは自らの執拗な理性を最後まで捨てることはできず、かと言って理性を大々的に押し進めれば救済に関して極めて楽観的なカトリック教へと逆戻りしてしまう。カトリック教こそその理由がどうあれ彼が捨て去った宗教である。カトリック教へのダンの批判は『説教集』でも随所に見られるが、その大きな理由の一つはカトリック教が人間の力を過大評価してしまったことにある。ダンは決して人間本来の能力である理性をカトリック教のように過大評価もしないしピューリタンのように過小評価もしない。「修正された理性」には巧みにアングリカンとして中道を歩むダンの姿を見ることができるのである。

6

これまで初期の詩から後期の『説教集』に至るまでダンの理性と信仰について見てきたが、一貫して言えることはダンには理性が根強く存在していたということである。人間の本質は理性であるといったダンにあって一見理性と相反するような宗教においていかに理性を扱うかは終始彼を悩まし続けた問題であった。1590年代の『風刺詩第三番』に見られるあの宗教上の真理・神秘は必ず発見されるといった自信に満ちた態度は徐々

に揺らぎこそすれ決して消えることはなかった。この理性と信仰の微妙な関係をダンは宗教詩、とりわけ『聖なるソネット』で扱うことになるが、神へ無条件にすべてを投げ出したい衝動と自己のなかに依然として強く残る理性が、ダンが神の恩恵なしではなにも出来ないと言いながらも、ダンの背後で糸をひき、彼を敬虔に神の前に投げ出すことを妨げている。このためにダンの宗教詩がわざとらしさを読者に与えているのであろう。ブッシュがダンの熱心な権威受諾、熱心な救済探究、狭量、過度の口調になにか不自然なもの、転向した俗人、インテリの信心振りを目だたせるものを見い出すのも最後まで執拗にダンにとりついて離れない理性を考えてのことであろう。⁴⁶⁾ダンの神との和解に幾分不自然さを残している理由の一つもその理性の根強さの故であろう。このような執拗な理性が『神学論集』、『説教集』にも存在し続け、そのなかでダンは信仰との調和を求めるのである。理性が信仰よりも早く付与される人間にあっては理性を消し去ることはできない。我々は生得的な理性をいかようにも利用できるが信仰と一致した理性、修正された理性こそがダンの理想とするところで、修正された理性のなかにダンは理性と信仰の調和を見出したとすることができよう。ダンのアキナス的な理性への信頼が彼のアウグスティヌス主義が強まるにつれて弱くなったと言ったのはブレッドヴォールドであるが、確かにダンの理性一辺倒の考えが宗教を前に徐々に信仰によって取って代わられていくが、決して理性への信頼が弱くなっていくというのではない。ダンはこれまで見たように理性への反動として信仰主義者へ走ることはしない。理性への不信、限界は認めながらもその理性を完全に捨てることはしない。むしろ理性には限界がありながらも人間の根源的な能力として認め、信仰が理性の欠点を補うという考えを抱くようになる。序論で挙げた『風刺詩第三番』と説教との比較で前者では理性や知性に基づき宗教の真理・神秘を獲得できると言い、後者では理性ではなくて信仰によらなければ宗教の神秘は得られないと言っていたが、それは宗教の諸神秘に関しては理性はもはや役に立たず、信仰に依存せざるをえないということを徐々に認め始めたダンの姿であった。それはまた自然人から再生した人間へ、「普通の理性」から「新しい理性能力」へと到達したダンの精神的な progress でもあったであろう。一人の人間が徐々に宗教に目覚め、宗教を真剣に考えたときどうし

でも超えることのできない壁は神秘であろう。その壁をダンは「普通の理性」から「新しい理性能力」へと歩むことによって乗り越えることができたと言えよう。

注

- (1) テキストは W. Milgate (ed.): *John Donne: The Satires, Epigrams and Verse Letters* (Oxford: Clarendon Press, 1967) を使用。以下行数のみを記す。
- (2) M. Thomas Hester (ed.): *Letters to Several Persons of Honour (1651)* (New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1977), p.51.
- (3) テキストは George R. Potter and Evelyn M. Simpson (eds.): *The Sermons of John Donne* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1953-62), 10 vols. により以下巻数とページ数のみを記す。
- (4) テキストは Helen Gardner (ed.): *John Donne: The Divine Poems* (Oxford: Oxford University Press, 1978) を使用。以下行数のみ記す。なお本論で論じる詩については J. Smith (ed.): *John Donne: The Complete English Poems* (Harmondsworth: Middlesex, 1971), B. K. Lewalski: *Protestant Poetics and the Seventeenth Century Religious Lyric* (New Jersey: Princeton University Press, 1979), Arthur F. Marotti: *John Donne, Coterie Poet* (Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1986) 等に教えられるところが多い。
- (5) テキストは Gardner, *op. cit.*
- (6) J. B. Leishman: *The Monarch of Wit* (London: Hutchinson University Library, 1969), p.258.
- (7) テキストは Gardner, *op. cit.*
- (8) テキストは *Ibid.*
- (9) テキストは *Ibid.*
- (10) テキストは *Ibid.*
- (11) テキストは Milgate, *op. cit.*
- (12) テキストは *Ibid.*
- (13) L. I. Bredvold, 'The Religious Thought of Donne in Relation to Medieval and Later Traditions', in *Studies in Shakespeare, Milton and Donne* (New York, 1925), p.226. この論文の 아우グスティヌスの反知性主義のみの強調へ反論したのが Sherwood で、彼は 아우グスティヌスの 'rational' な面、理性を重視し、ダンの理性観は 아우グスティヌスによって説明されるとする。[Terry G. Sherwood, "Reason in Donne's Sermons," *ELH* 39(1972), p.366.] Sherwood の論文には教えられる点が多い。
- (14) テキストは Gardner, *op. cit.*
- (15) Marotti, *op. cit.*, p.257.
- (16) Patrick Grant: *The Transformation of Sin* (Montreal and London: McGill-Queens University Press and University of Massachusetts Press, 1974), p.58. また William H. Halewood: *The Poetry of Grace* (New Haven: Yale University Press, 1970), pp.14-5 をも参照。
- (17) テキストは W. Milgate (ed.): *John Donne: The Epithalamions, Anniversaries, and Epicedes* (Oxford: Oxford University Press, 1978) を使用。なおこの詩と 아우グスティヌスとの関係についてはシャーウッドの以下の論文と書を参照されたい。Terry G. Sherwood, "Reason, Faith, and Just Augustinian Lamentation in Donne's Elegy on Prince Henry", *SEL* 13(1973): pp. 53-67. *Fulfilling the Circle* (Toronto: University of Toronto Press, 1984), pp.30-34.
- (18) Itrat-Husain: *The Mystical Element in the Metaphysical Poets of the Seventeenth Century* (New York: Biblio and Tannen, 1966), p.59.
- (19) テキストは Evelyn M. Simpson (ed.): *Essays in Divinity* (Oxford: Oxford University Press, 1952) を使用。
- (20) *Ibid.*, p. 16.
- (21) *Ibid.*
- (22) *Ibid.*
- (23) *Ibid.*, p. 57.
- (24) *Ibid.*, p. 21.
- (25) *Ibid.*, p. 55.
- (26) *Ibid.*, p. 13.
- (27) *Ibid.*, p. 6.
- (28) *Ibid.*, p. 59.
- (29) *Ibid.*, p. 24.
- (30) *Ibid.*, p. 10.
- (31) *Ibid.*, p. 92.

- (32) *Ibid.*, p. 50.
- (33) *Ibid.*, p. 39.
- (34) *Ibid.*, p. 76.
- (35) *Ibid.*, p. 80.
- (36) *Ibid.*, p. 80.
- (37) *Ibid.*, p. 98.
- (38) *Ibid.*, p. 100.
- (39) 復活や三位一体のほかにも処女懐妊や神が人間となったことは理性では把握できなとしている。(IX, 355)
- (40) III, 239 では次のように言っている。“To beleeve implicitly as the Church beleeves, and know nothing, is not enough: know thy foundations, and who laid them.”
- (41) この点に関しては Itrat—Husain, *op. cit.*, pp. 92—6 をも参照。
- (42) H. White は「ダンは信仰と知識の調和は困難であると考えていた」と言っているがこの見方は受け入れ難い。(H. White: *The Metaphysical Poets* [New York: Collier books, 1966], p. 135) Coffin もダンの理性は宗教とは無関係の真理を見出したと言うが、この見解も筆者は受け入れることができない。(C. M. Coffin: *John Donne and the New Philosophy* [New York: The Humanities Press, 1958], p. 288) 又 J. Carey は「『説教集』では理性のとらえ所のなさがダンを怒りで満たしている。『説教集』は理性はより信頼できないという事実への憤慨を記録している」というが、彼の言う「とらえ所のなさ」、「怒り」、「憤慨」を筆者は読みとることはできない。(John Carey: *John Donne: Life, Mind, & Art* [London: Faber & Faber, 1981], p. 256) 筆者としては、ダンが信仰と理性の調和方法を徐々に見つけ出していくと考える Mahood の見解に近いが、Mahood は「修正された理性」には触れていない。(M. M. Mahood: *Poetry and Humanism* [New York: The Norton Library, 1970], p. 118 and p. 121)
- (43) VIII, 220 and VIII, 230.
- (44) Simpson, *op. cit.*, p. 20.
- (45) IV, 119.
- (46) Douglas Bush: *English Literature in the Earlier Seventeenth Century 1600—1660* (Oxford: Oxford University Press, 1945; rev. ed. 1962), p. 327.